

第2節 中学生の学習観・成績観

1. 成績観

①成績の自己評価

成績の自己評価は、真ん中を中心に左右対称のヤマ型の分布である。国語の散らばりが比較的少なく、英語と数学は「できない」と自己評価している中学生が国語に比べて多い。教科ごとの男女差も大きい。

Q

あなたの学校での成績についてうかがいます。

現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

次の教科（数学、国語、英語）の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか。

今の中学生は、自分の現在の成績についてどのようにとらえているのだろうか。

第3回調査でも、(1)現在の成績はどのくらいか、(2)どのくらいの成績がとれたらよいか、(3)(現在の成績は別として)うんとがんばればどれくらいの成績がとれると思うか、という3つの側面から中学生の成績観を探ってみた。

《総合成績の自己評価》

ここでは、総合成績の自己評価を「1(上のほう)」～「4(真ん中)」～「7(下のほう)」の7段階で尋ねている。全体的な特徴としては、「4」に24.1%が該当し、「3」(18.0%)と「5」(17.8%)の層を足し合わせた約6割が中央に集まっている(表1-2-1)。相対評価として問われていることも

表1-2-1 総合成績の自己評価(時系列・性別)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)	第3回	
				男子(1307)	女子(1184)
1(上のほう)	4.9	5.5	4.9	5.3	4.4
2	12.0	13.7	12.0	11.9	12.2
3	20.1	18.1	18.0	16.6	19.7
4(真ん中)	21.9	21.0	24.1	23.4	24.7
5	16.9	17.8	17.8	17.6	17.8
6	13.3	12.1	12.6	13.2	12.2
7(下のほう)	9.8	9.5	8.7	9.8	7.6

注)()内はサンプル数。

あり、成績の自己評価は左右対称のヤマ型に近い分布となっている。第1回・第2回調査と比べても、大きな変化は見当たらない。性別にみると、女子のほうが「3」という回答が若干多く、男子のほうが二極化する傾向が強いことが読み取れる。

《教科の成績の自己評価》

次に、数学と国語と英語について、7段階の自己評価をしてもらった(表1-2-2)。

いずれも「4」の回答がもっとも多く両方に裾野が広がる分布であるが、教科によって多少の違いがある。1つは、真ん中への集中度の違いである。国語の場合には、約3割が「4」に集中するが、数学と英語では2割あまりにとどまる。数学や英語に比べて国語の成績の自己評価の分散は小さいと言える。こ

れは、一般的な学力試験の実際の得点分布でもしばしば観察される事実である。もうひとつは、分布の歪みに関する違いである。国語は左右対称の分布型を示すが、数学と英語は「1」～「3」の割合が比較的小さい。数学と英語はすでに「できない」という自己認識が強くなっていることがわかる。

性別による違いもかなり大きい。男子は数学を「1(上のほう)」とする割合が大きく、女子の2倍に上る(9.0%と4.6%)。数学が好きで理解度(自己評価)も高いという先述の結果と符合している。女子は、国語の自己評価が男子よりもかなり高くなっている。この点も先のデータと重ね合わせると理解しやすい。また、英語については、「7(下のほう)」と回答した男子の割合が女子の2倍近くになっている点が注目される(15.0%と7.9%)。

表1-2-2 教科の成績の自己評価(性別)

(%)

		全体(2503)	男子(1307)	女子(1184)
数学	1(上のほう)	7.0	9.0	4.6
	2	12.1	15.2	8.8
	3	15.2	14.4	16.2
	4(真ん中)	23.7	22.5	25.0
	5	16.8	15.2	18.6
	6	13.6	12.2	15.1
	7(下のほう)	9.9	9.9	9.8
国語	1(上のほう)	4.6	3.9	5.4
	2	11.0	9.5	12.5
	3	18.2	16.3	20.4
	4(真ん中)	30.2	28.1	32.6
	5	18.3	21.8	14.4
	6	11.1	12.7	9.2
	7(下のほう)	5.2	6.3	3.9
英語	1(上のほう)	8.0	8.7	7.0
	2	12.6	13.2	12.1
	3	15.6	14.4	17.0
	4(真ん中)	21.0	18.7	23.5
	5	16.7	16.0	17.5
	6	12.9	12.5	13.4
	7(下のほう)	11.7	15.0	7.9

注) ()内はサンプル数。

②とりたいと思う成績

中学生の希望する成績は、7段階の中の「1（上のほう）」と「2」に6割以上が集中。「とれたらいい成績水準」はこの10余年でまったく低下せず、むしろわずかずつ上昇している。



あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。

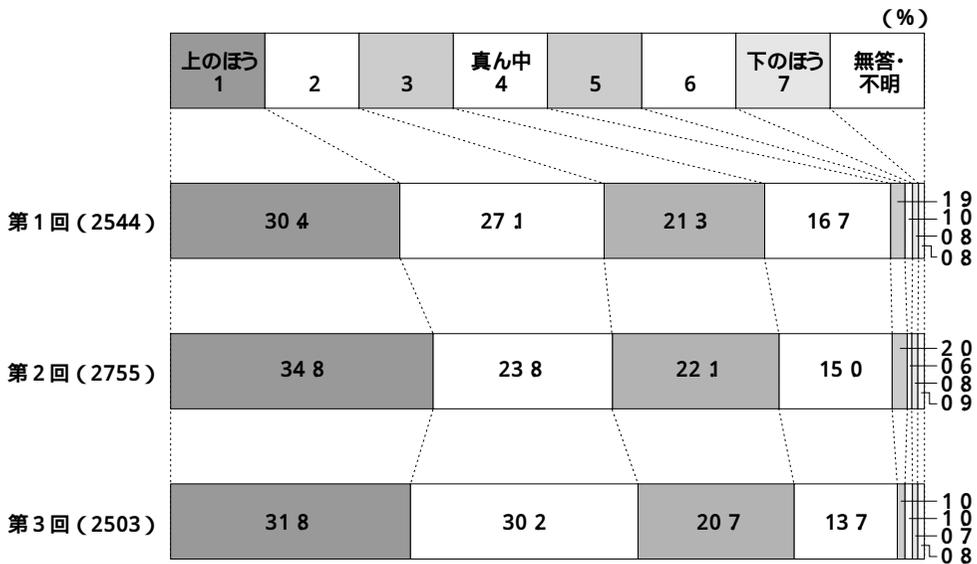
中学生は、どのくらいの成績を望んでいるのだろうか。次に、自らが期待する成績の水準について検討を加えてみる(図1-2-1)。

成績の自己評価とは異なり、回答の分布は「1（上のほう）」に大きく偏っている。全体の31.8%が「1」と回答しており、さらに「2」を加えると全体の62.0%がこの水準を望んで

いる。「5」～「7」と回答した者は3%にも満たない。

しかも、この10余年の間に「とれたらいい成績水準」は低下していないようである。「1」～「3」の合計で見ると、第1回調査から78.8% 80.7% 82.7%とわずかずつ増加している。

図1-2-1 とりたいと思う成績（時系列）



③がんばればとれると思う成績

「がんばればとれると思う成績」もまたきわめて高水準にある。上位の「1」～「3」に78.6%が集中し、この割合は、第1回調査から第3回調査まで減少するどころか増加している。



現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

さらに、「現在の成績は別としてとれると思う成績」を尋ねた。学業成績という点に限定して、どのくらい潜在能力があると自分で評価しているかを探るための問いである。

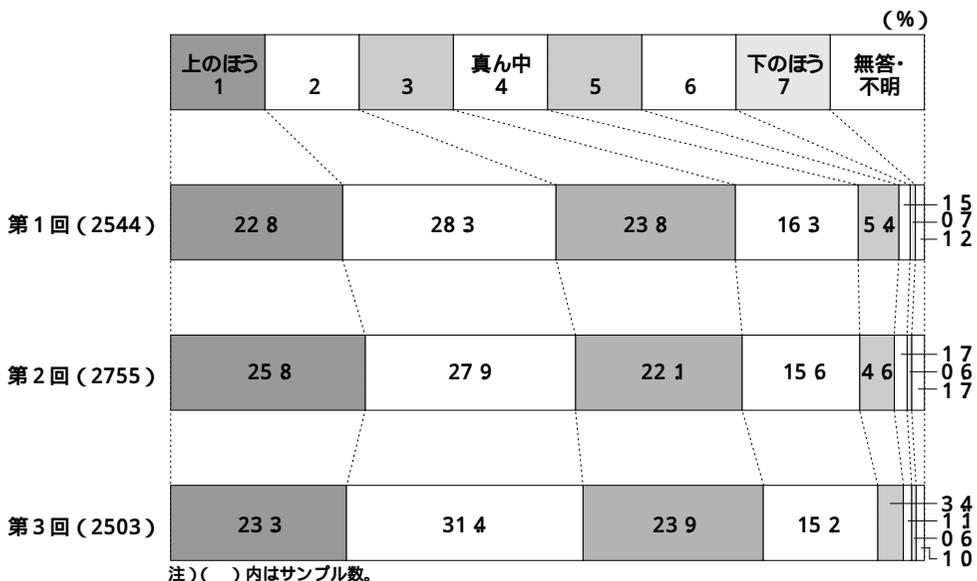
結果は、前項とかなり似通っている（図1-2-2）。いくらか分布は、「下のほう」に移行しているものの、全体の23.3%が「1」と回答している。上位の「1」～「3」を合

計すると、78.6%に達している。

ここでも、時系列変化は「下のほう」に移っているわけではない。先ほどと同じように「1」～「3」の合計でみると、74.9% 75.8%

78.6%とこれもまたわずかながら増加している。成績の自己期待も潜在能力認知も低下を示していないところに1つの特徴があるようである。

図1-2-2 がんばればとれると思う成績（時系列）



④成績観・学力観

中学生は、学力の重要性を見落としているわけではなく、成績にこだわらない者は少数派。他方では、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」という回答が62.8%に上る。



あなたは、次のように思うことがありますか。

中学生の成績に対する希望はかなり高い水準にあった。先述したのは、いわば成績のおおまかな量的側面である。ここでは、もう少し具体的内容に踏み込んで、彼らの成績観や学力観の底流を探ってみたい。

第3回調査も第2回調査と同様に、6項目について尋ねた(表1-2-3)。該当率が多い順にあげておくと、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(62.8%)、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(57.8%)、「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」(45.9%)、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」(32.7%)、「今は勉強することが一番大切なことだ」(24.5%)、「そんなに勉強しなくても、なん

とか進学できるだろう」(16.7%)となる。上昇志向はかなり強く、「進学のための手段」としての学力の重要性を見落としているわけではない。とはいえ、学力は、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力」であって、それ自体を絶対視しているわけではない。学校が楽しければよいというのでもなければ、勉強一辺倒でもない。中学生は独特のバランス感覚をもって、勉強や学力をみているようである。

一貫した時系列変化はさほどみられないが、「今は勉強することが一番大切なことだ」が約5ポイント減となり、「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」が8ポイント以上増え、第1回調査のレベルに戻った点が目を引く。

表1-2-3 成績観・学力観(時系列)

	(%)		
	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	59.3	62.1	62.8
できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい	62.6	56.4	57.8
どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい	44.1	37.7	45.9
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	27.8	33.7	32.7
今は勉強することが一番大切なことだ	29.8	29.7	24.5
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	—	12.0	16.7

注1) 複数回答。 注2) —は該当項目なし。 注3) ()内はサンプル数。

⑤ よい成績に大切だと思ふこと

よい成績をとるのに大切な条件トップ・スリーは、「授業をしっかりと聞く」「努力」「上手な勉強法」である。「運」や「よい学習塾や予備校に行く」をあげる割合が第1回調査よりも増加している。



よい成績をとるためには、次のことはどれくらい大切だと思いますか。

中学生は、よい成績をとるためにはどのような条件が大切だと考えているのだろうか。ここでは、第2回調査と同様に、10の条件をあげてそれぞれの「大切さ」を評定してもらった(表1-2-4)。

「とても大切」の割合でみると、「授業をしっかりと聞く」(79.4%)、「努力」(77.8%)、「上手な勉強法」(71.4%)がトップ・スリーである。中学生は、授業を中心にして上手な勉強法を身につけながら努力することがよい成績をとる鍵を握っていると考えている。これに、「人に負けたくないという気持ち」(52.7%)、「教え方の上手な先生」(45.2%)、「自分に合った問題集・参考書」(41.3%)が

続く。「よい学習塾や予備校に行く」(10.4%)、「家族の協力」(13.4%)、「生まれつきの能力」(17.9%)は「よい成績」には結びつきにくいととらえられている。

これらの順位は第2回調査とまったく同じであるが、細かくみるといくつか変化もみられる(同表)。たとえば、「運」(「とても大切」「まあ大切」の合計で第1回調査よりも7.1ポイント増)や「よい学習塾や予備校に行く」(5.4ポイント増)は、本人の努力によってはカバーしきれない要因(しばしば家庭的・経済的環境によって左右される条件)である。これらが少しずつウェイトを大きくさせている点は気になるところである。

表1-2-4 よい成績に大切だと思ふこと(時系列)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2503)
努力	96.9	96.9	97.4〔77.8〕
運	58.6	56.9	65.7〔22.8〕
上手な勉強法	94.4	94.9	95.6〔71.4〕
自分に合った問題集・参考書	79.8	82.0	80.1〔41.3〕
授業をしっかりと聞く	95.8	96.6	96.5〔79.4〕
生まれつきの能力	45.1	44.6	46.9〔17.9〕
人に負けたくないという気持ち	85.7	84.9	84.7〔52.7〕
家族の協力	49.7	47.4	49.8〔13.4〕
よい学習塾や予備校に行く	34.7	38.3	40.1〔10.4〕
教え方の上手な先生	78.7	80.3	81.0〔45.2〕

注1)数値は「とても大切」と「まあ大切」の合計。注2)第3回の〔〕内は「とても大切」の割合。
注3)〔〕内はサンプル数。

2 . 学習していて感じること

数学や社会を自ら工夫して考え学ぶという中学生は比較的少なく、この5年間で状況は変わっていない。男女によって学ぶことの動機づけが異なっており、女子の場合、コミュニケーションや人間関係への関心が高い。

Q

あなたは勉強していて、次のように感じることはありますか。

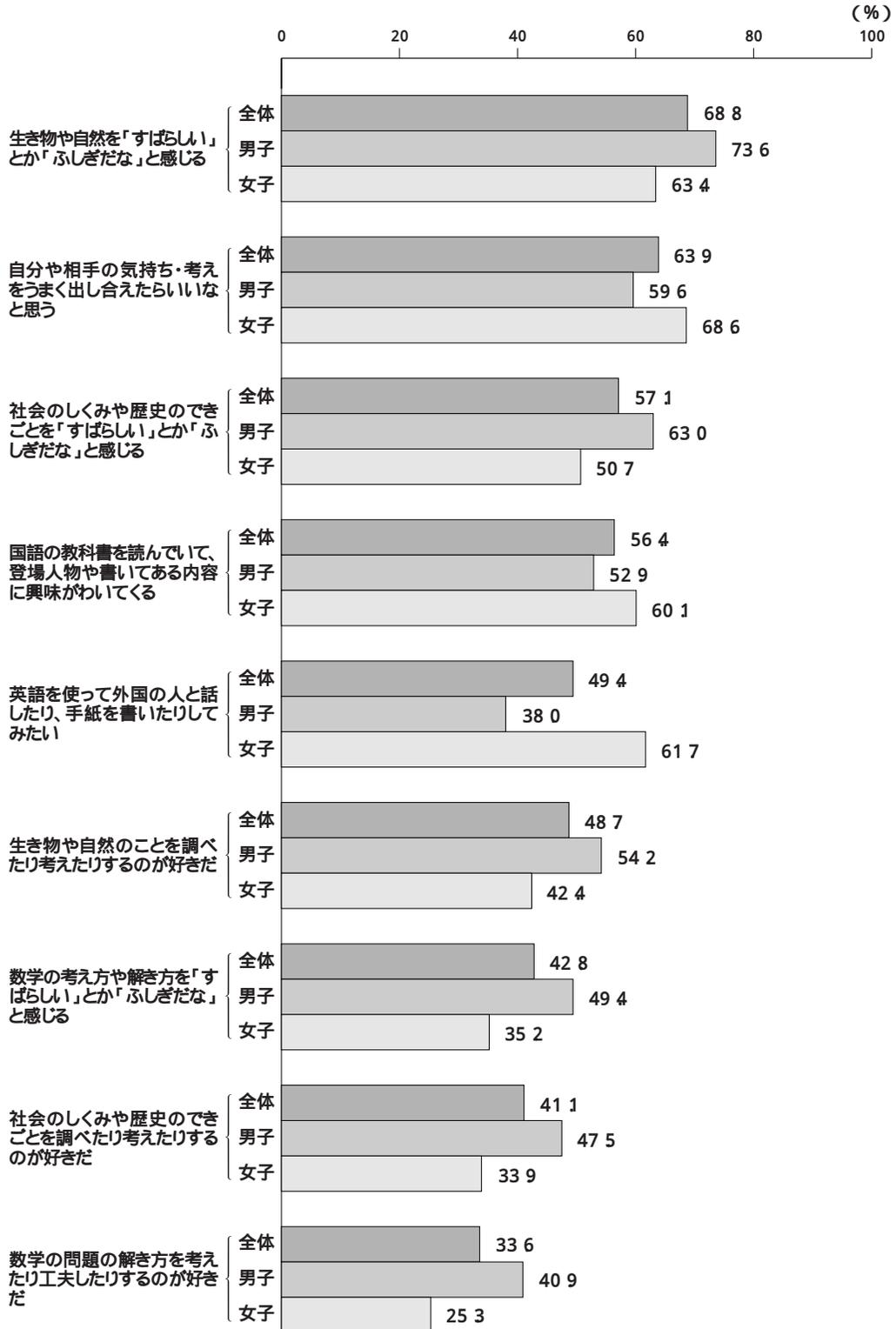
学習は、単に知識を習得すること自体の喜びだけでなく、中学生が視野や生活世界を広げていくきっかけをもたらしてくれる。ここでは、9つの項目を設定して、それぞれについて4段階（「よくある」「時々ある」「あまりない」「ぜんぜんない」）で回答してもらった（図1-2-3）。

「よくある」「時々ある」の合計でみると、もっとも多いのは「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」（68.8%）であり、これに「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」（63.9%）、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」（57.1%）、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」（56.4%）が続く。これに対して、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」（33.6%）や「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」（41.1%）や「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」（42.8%）のはどちらかといえば少数派である。第2回調査と比べても大きな変化は

なく、新学習指導要領の内容が移行措置により一部実施されていても専門家の感じ方・受け取り方を中学生たちに伝えていくことはできていない。

重要な違いは、性差に表れている。男子が「数学の考え方や解き方を『すばらしい』」とか『ふしぎだな』と感じる」「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」と答えるケースが多いのに対して、「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」の2項目は女子に顕著である。前節の知見と照らし合わせるなら、この違いにはコミュニケーションや人間関係に対する興味・関心の違いが表れていると考えてよい。「学ぶことの内的なインセンティブ」が男女によって大きく異なっている状況を認識することは、学力についての議論の中ではすっぱりと抜け落ちている重要なポイントである。

図1 - 2 - 3 学習していて感じること（性別）



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。

注2) サンプル数は全体2503人、男子1307人、女子1184人。

3 . 学習上の悩み

「好きになれない科目」があり、「上手な勉強法がわからない」という悩みが一般的で、悩みは女子に多い。「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という意識は一貫して強まっている。



あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

さて、中学生は勉強する過程で、どのような悩みを抱いているのだろうか。第3回調査では、「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」を新しく項目として加え、全部で15項目について複数回答形式で回答を求めた。

もっとも多かったのは、「どうしても好きになれない科目がある」(73.2%)であり、全体の4分の3にも及んでいる(表1-2-5)。さらに、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.8%)、「覚えなければいけないことが多すぎる」(63.0%)と続き、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」(56.5%)、「こつこつと努力できないで困る」(55.7%)、「わかりやすい授業にしてほしい」(52.2%)も半数を超えている。これに対して、多くの中学生は、よい参考書・問題集がないことや親や教師の期待を必ずしも悩みとして受け止めていない。これは、中学生時点ですでに学習への構えが分化してお

り、彼らなりに受容しているからではないかと考えられる。

性別にみると、ほとんどの項目で女子のほうが多く、「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」「覚えなければいけないことが多すぎる」「上手な勉強の仕方がわからない」といった気持ちを抱く生徒が男子よりも多い。

時系列でみると、第2回調査ではあまり変化を示さず、第3回調査で増加した項目が目立つ(図1-2-4)。総じて肯定する割合の大きな項目で、さらに率が高まったケースが多い。一貫して増加しているのは、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないかと思う」であり、第1回調査よりも10.6ポイントも増加している。学習内容の意味が意識の上で少しずつ希薄になっていることが学習時間の減少などの一因となっているかもしれない。

表1-2-5 学習上の悩み(性別)

(%)

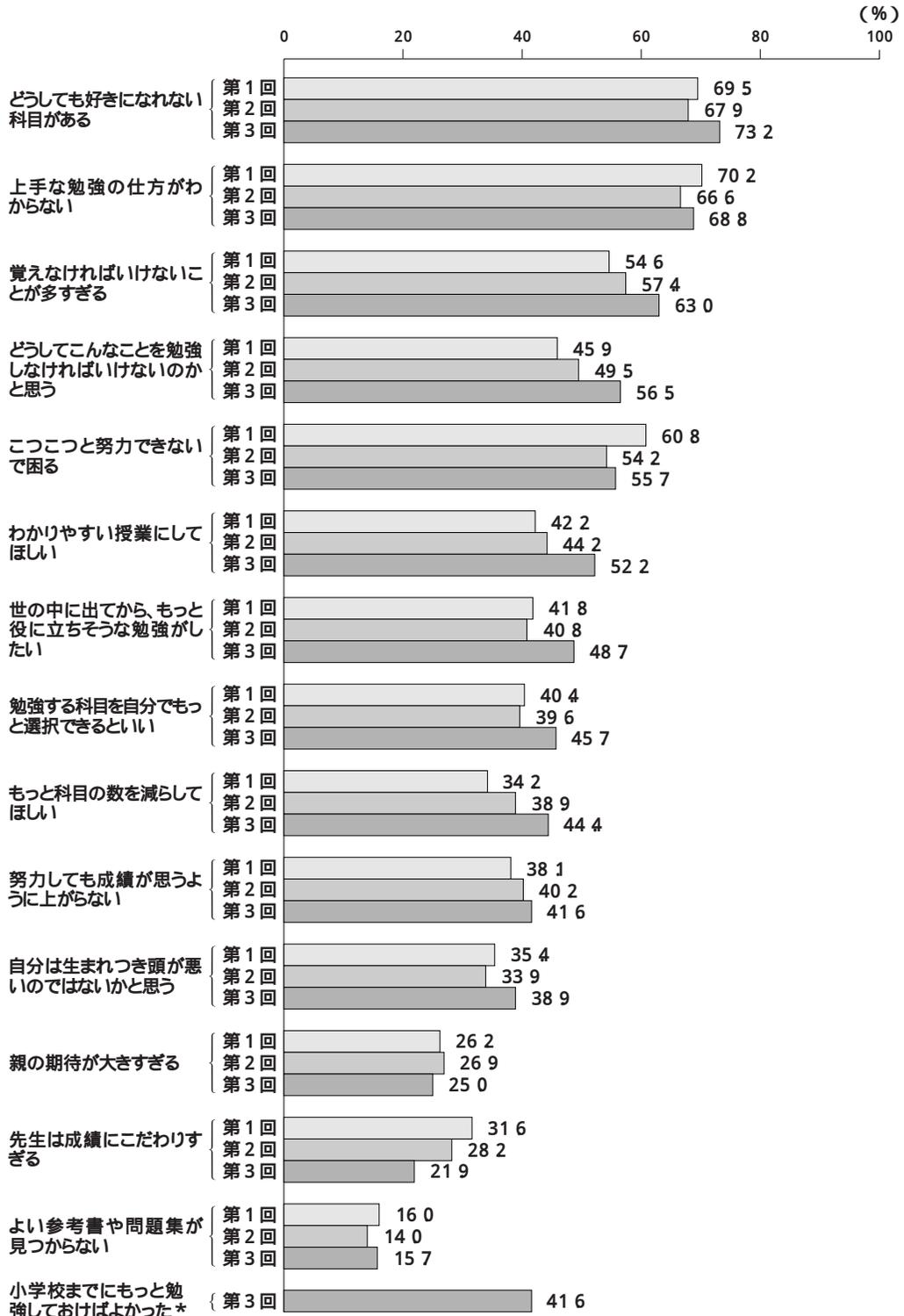
	全体(2503)	男子(1307)	女子(1184)
どうしても好きになれない科目がある	73.2	71.3	75.3
上手な勉強の仕方がわからない	68.8	64.7	< 73.4
覚えなければいけないことが多すぎる	63.0	58.0	≪ 68.6
どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う	56.5	53.2	< 60.4
こつこつと努力できないで困る	55.7	54.1	57.3
わかりやすい授業にしてほしい	52.2	49.0	< 55.8
世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい	48.7	49.2	48.1
勉強する科目を自分でもっと選択できるといい	45.7	45.6	45.8
もっと科目の数を減らしてほしい	44.4	44.5	44.3
努力しても成績が思うように上がらない	41.6	38.2	< 45.7
自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う	38.9	34.7	< 43.7
親の期待が大きすぎる	25.0	28.6	> 21.2
先生は成績にこだわりすぎる	21.9	20.4	23.8
よい参考書や問題集が見つからない	15.7	15.4	16.0
小学校までにもっと勉強しておけばよかった	41.6	42.2	40.8

注1) 複数回答。

注2) ≪ ≫は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。

図1 - 2 - 4 学習上の悩み(時系列)



注1) 複数回答。

注2) *は第1回、第2回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2544人、第2回2755人、第3回2503人。

4 . 進路・進学意識

① 高校への進学

高校進学希望率は94.6%である。普通科希望が7割を、専門学科希望も2割を超える。また、「推薦入試」志向が強まっている。「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」を希望する者が最多で、「自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校」も人気が高い。

Q

あなたは中学卒業後、高校（高等専門学校を含む）に進学したいと思っていますか。

[思っている人にうかがいます]

どの学科に進学したいですか。

どのような高校に進学したいですか。

高校へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試」と「一般入試」の2つの方法があります。あなたは、どちらの方法で進学したいですか。

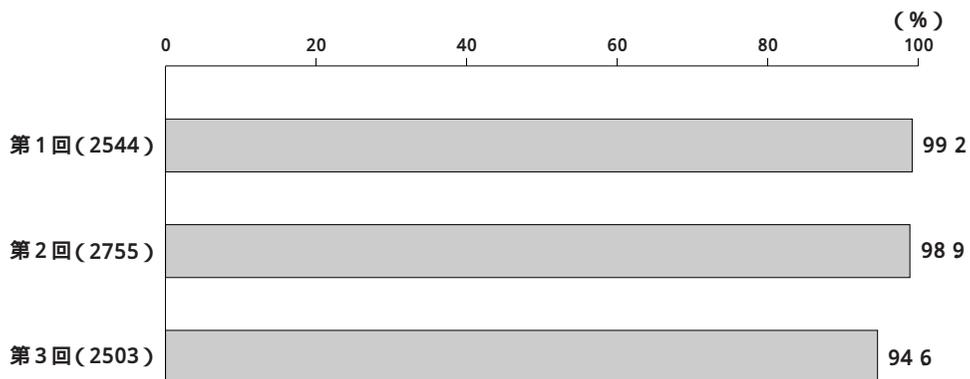
最後に、中学校を卒業してからの進路などについて尋ねた。

まず、卒業後進学を希望する中学生は、全

体の94.6%に及んでいる（図1-2-5）。

高校進学は社会心理的に義務化しているとい
ってよい状況にある。

図1-2-5 高校への進学希望（時系列）



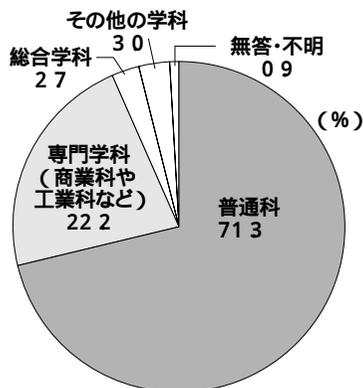
注) ()内はサンプル数。

さらに、進学希望者にのみ希望する学科などを尋ねてみた。普通科希望が71.3%、専門学科が22.2%を数え、総合学科は2.7%にとどまった(図1-2-6)。全体的に普通科志向が強い中で、特に男子を中心に専門学科人気が比較的高い点は注目される。あわせて、高校進学の際の入試方法について尋ねているが、一般入試よりも推薦入試を好む生徒が14.7ポイントも多い(図1-2-7)。

それでは、中学生はどのような高校を希望しているのか(図1-2-8)。9つの項目(「その他」を含む)について複数回答を求めたところ、極端に抜きん出ているはないが、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(62.3%)がもっとも人気が高く、「自分の好

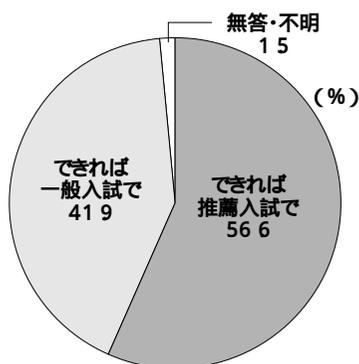
きな教科・科目を自由に選択できる高校」(58.9%)がこれに続く。「校則がきびしくない高校」(51.6%)や「職業資格を取るのに有利な高校」(50.3%)が半数にも達している。これに対して、「それほど努力しなくても入学できる高校」(20.1%)や「体験的な学習などのカリキュラムに特色のある高校」(20.3%)を希望する者は比較的小さい。さらに、「進学状況のよい高校」もわずか33.4%にとどまっている。性別による違いも比較的大きく、「校則がきびしくない高校」と「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」は女子に人気があり、「部活動のさかんな高校」は男子に希望者が多い。

図1-2-6 希望する学科



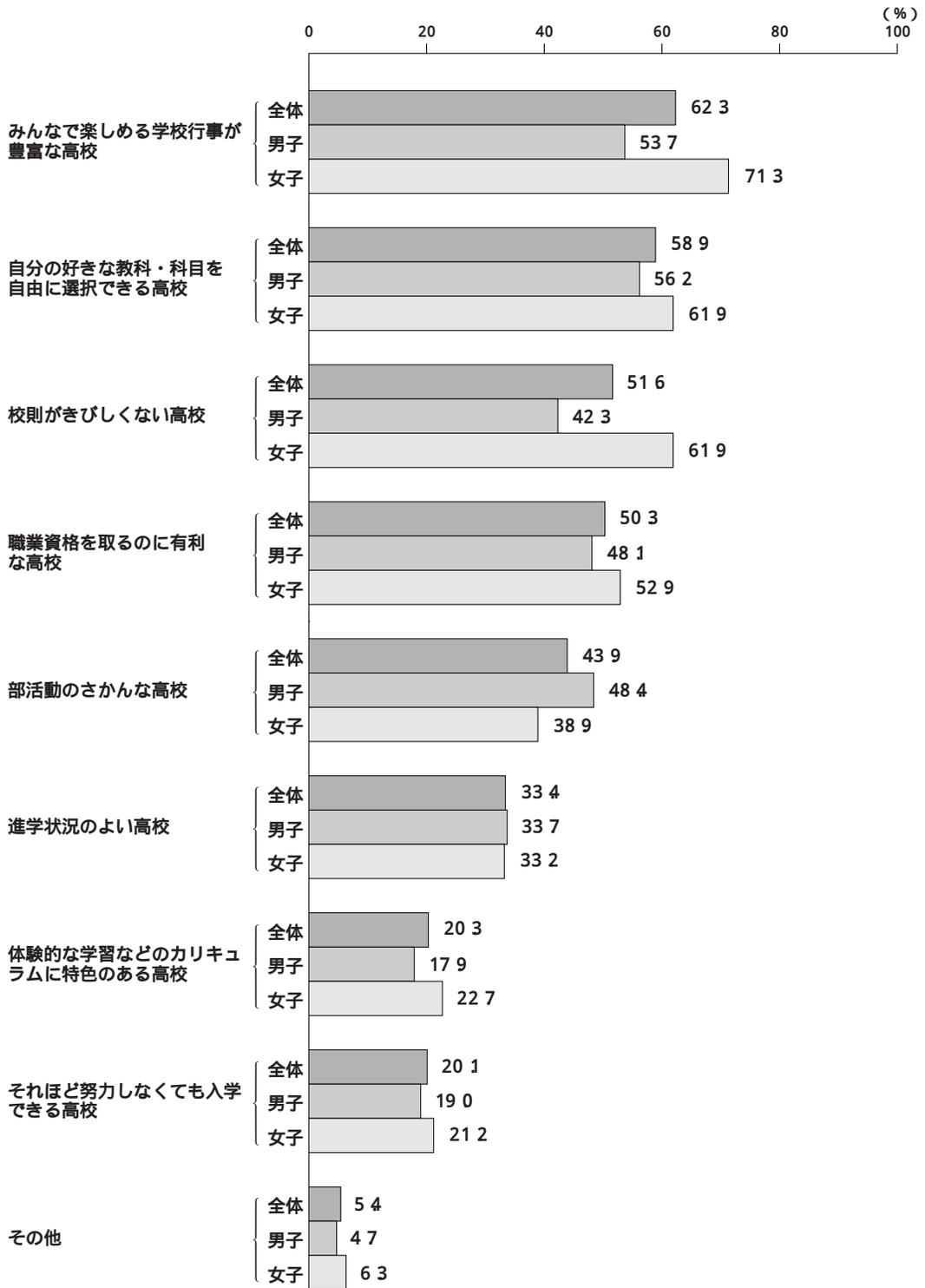
注) サンプル数は2369人。

図1-2-7 希望する入試方法



注) サンプル数は2369人。

図1-2-8 希望する高校のタイプ(性別)



注1) 複数回答。

注2) サンプル数は全体2369人、男子1228人、女子1131人。

②希望する進学段階

希望する進学段階の最多は「四年制大学まで」(31.7%)であるが、女子は二年制の中等後教育機関を希望する傾向がある。また、「専門学校・各種学校まで」「高校まで」の希望者が増加傾向にある。

Q

あなたは中学卒業後、高校（高等専門学校を含む）に進学したいと思っていますか。

[思っている人にうかがいます]

あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

最後に、6つの選択肢を設けて、将来の進路希望を尋ねた。なお、第3回調査については、高校進学希望者(2369人)を母数としているため単純な比較には注意が必要である。とはいえ、希望する進学段階のたまかな傾向はつかめる。

「四年制大学まで」が31.7%でもっとも多く、「高校まで」が26.8%、以下、「専門学校・各種学校まで」(19.7%)、「短期大学まで」(14.4%)となっている(表1-2-6)。女

子は、二年制の中等後教育機関「専門学校・各種学校」や「短期大学」への希望が多く、男子は「高校まで」「四年制大学まで」を希望する者が多い。さらに重要なのは、「専門学校・各種学校まで」と「高校まで」の希望者の割合が第1回調査よりそれぞれ5ポイント前後増加したという点である。「短期大学まで」は下げ止まったが、不況下において高等教育の「地図」は少しずつ変わり始めているのかもしれない。

表1-2-6 希望する進学段階(時系列・性別)

(%)

	第1回(2544)	第2回(2755)	第3回(2369)	第3回	
				男子(1228)	女子(1131)
高校まで	22.2	26.1	26.8	31.1	> 22.2
専門学校・各種学校まで	14.6	16.2	19.7	13.3	≪ 26.7
短期大学まで	20.0	14.3	14.4	10.3	< 18.8
四年制大学まで	39.5	32.7	31.7	36.7	≫ 26.0
大学院まで	—	6.8	5.4	6.5	4.2
その他	1.8	1.5	1.3	1.4	1.1

注1) —は該当項目なし。

注2) ≪ ≫は男女で10%以上、< >は5%以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。第1回、第2回調査では全員に回答してもらっているが、第3回調査では高校進学希望者を母数としている。